赤馬通信
第5号

市川正一碑前祭参加のことなど

当研究所理事・下関市立大学学長　下山　房雄

山口県には田中角栄型の政治家がいないと言われることがある。選挙区に道路や橋をかけることに熱意を燃やさず、もっぱら中央政界での栄達を追う国士型の保守政治家が多いというのである。ほんとに土建屋との縁が薄いかということは措いて、吉田松陰的に国を憂うる格好をとる保守政治家が目立つのは確かだ。前回衆院選で下関を含む選挙区では、自共一騎打ちの結果、12万対5万で現官房副長官安倍晋三氏が当選したのだが、彼は天皇元首論者だと聞く。60年安保改定と71年核つき沖縄返還の立役者・岸信介＝佐藤栄作兄弟は、山口県出身だ。私の昼の散歩コース3本の一つのルートにある垢田八幡宮には、「元帥侯爵山縣有朋」の筆になる日清日露両戦役の記念碑に並んで、「支那事変大東亜戦慰霊碑　総理大臣佐藤栄作書　昭和四十三年九月垢田町建之」などと彫られた石碑が建っている。

尊皇と征韓の吉田松陰（松蔭の杉梅太郎宛書簡に「国力を養い、取り易き朝鮮、満州、支那を切り随え」と主張されているごとくである）以来の流れとは逆の立場で名を挙げた人も少なくない。私が旧制桐生中学1年のころ（1946－47年）、日本共産党のリーダーとして名を馳せたのは徳田球一、志賀義雄、野坂参三のトリオであるが、うち志賀、野坂は、萩出身である。徳田、志賀の「獄中18年」は、軍国少年だった私に驚愕の事実を突きつけるものであり「同志徳田、褒め称えよ！　素敵な同志！」の歌も抵抗なく耳に入った。志賀は、実は門司生まれ（1901川本姓）であるが、母の実家＝志賀家を継ぐため萩に移り、現在、観光ポイントになっている武家屋敷の街で育った。大天狗面が見世物となっている円政寺の入場料を払うと「萩城城下町絵図」を渡されるが、そこに名所として「志賀義雄旧宅」が指示されている。菊屋横丁を挟んで高杉晋作旧宅の向かい、田中義一誕生地の隣だ。ネット（ヤフー）で索引をかけるとなお315項目がヒットされる志賀であるが、観光客のほとんどは誰のことかもいまや知らないだろう。「獄中18年」をソ連頼りで頑張ったのでもあろうか、晩年60年代に日ソ共産党が対立したときに、ソ連にくっついて、左翼傍流にそれてしまった。

野坂参三は萩の商家生まれ（1892小野姓）、後に母方の姓を継ぎ、野坂姓となる。萩中学入学では志賀の先輩になる。野坂は、ソ連崩壊後の90年代に、実はスターリンに山本懸造を密告したソ連「内通者」だったことが暴露され、失脚した。野坂ゆかりの地が萩のどこなのかを示すものは、私の知るかぎりどこにもない（彼の全10巻だったかの自伝『風雪のあゆみ』（新日本出版社）はついに読まないうちに、版元絶版でいまや入手困難だ）。

下関＝山口では、大量テロ＝中国文化大革命を指導した毛沢東を熱狂的に支持した「左翼」が、未だけっこう力を持っていることにも驚かされる。その大衆紙「長周新聞」は地域情報量が豊富で、持っているネットワークの広さを想わせる。日の丸事件以来「私を刀で刺すという人以外、誰とでも会う」と宣言している私の学長室を繁く訪れるのは、この党派の主派あるいはその諸分派（複数！）である。ところで、日本共産党がソ連党にも中国党にも追随せぬ路線を選択し、「社会主義体制」崩壊後のいま、発達した資本主義国の中での共産党として異例に強い存在になるのに力を発揮した宮本顕治氏の出生地は、山口県光市だ（1908　当時熊毛郡光井村）。私は未だ訪ねてはいないが、生家などゆかりの場所が現存する。

その光井村は、また戦前の日本共産党幹部の一人、市川正一（1892－1945）の故郷でもある。本籍地だが、「うまれたところ　宇部」に始まる市川が獄中で描いたスケッチ「子供時代

からの思い出地図」９枚の６番目に「三井　十一、二才頃」とあるので、育った場所でもある。その地＝現光市鮎返りに、1972 年３月、萩の篤志家が土地を寄贈して立派な「市川正一の碑」が建てられた。以来、毎年市川が宮城刑務所で獄死（遺体は 1948 年３月に東北大医学部ホルマリン池槽で発見）した３月 15 日に碑前祭が行われていると知って、こんど参加した。天気予報では雨で、進入路がぬかるので長靴でもと言われていたのだが、当日は晴れ、あせびの花の白が見事な小園地に 40 人ほどが集まった。

乞われて私は次のような挨拶を行った。―「戦後民主主義は、自由な思想、言論の表明を、社会的経済的に規制抑圧する不十分さを残してはいるが、逮捕、投獄といった権力による政治的弾圧は禁じているという進歩性を持つ。その進歩は、アメリカ占領軍が与えたのではなく、市川さんなど自由も民主主義も無かった戦前戦中の運動家たちの命がけの活動の貴重な成果として獲得されたものと理解する。・・・」

私に続けて挨拶した田熊真澄氏（治安維持法国家賠償要求同盟山口県本部名誉会長）は、市川正一氏とともに法廷闘争を闘った現在 93 歳の老人である。老人の表現を使うのにためらいを感ずるほどお元気な方で、碑前に至る 10 段ばかりの石段をひょいひょい昇降されるし、話も明晰、力のこもったものであった。この田熊氏は、三井村から数キロしか離れていない塩田村の生まれで（1908）、1925 年に上京して上野の岩倉鉄道学校に入り、目蒲電鉄の車掌となって組合運動に参加、1929 年４月 20 日に逮捕された。逮捕は徳田、志賀らが捕まった 4.16 共産党大弾圧の一環だったが、当時のご本人は「弾圧されるまで党のことも科学的社会主義のことも知りませんでした。この市ヶ谷の未決での官本と自分で買った本とで勉強して確信をつけていきました。」という状態だった。1932 年に「入党未遂罪」！で懲役３年の判決を受ける。

田熊氏が共産党に入党するのは、1995 年である。「三月、志位和夫書記局長（当時）が、地方選挙の応援に来て市川正一碑に参りました。その時、私も一緒に参加して書記局長からあらためて入党を訴えられました。・・・思えば長い道のりでした」とご本人は述懐している。この田熊さんの道のりは、林洋武氏（前日本共産党山口県委員長、現国賠同盟山口県本会長）が聞き書きをして A4×19 頁のプリント『最後の 4.16 被告　治安維持法犠牲者　田熊真澄さんに聞く』にまとめられている（かながわ総研に１部寄贈しておきます）。因みに林洋武氏は、東大経済学部大河内ゼミ出身で、広い意味での（私の学部ゼミ－隅谷三喜男先生、院ゼミ－氏原正治郎先生は大河内先生の弟子）私の同門後輩の関係で私は彼との知己を得、この冊子を頂いた。そして、この冊子で毎年の市川正一碑前祭のことを知ったのである。

碑前祭参加の予習として『獄中から　心優しき革命家・市川正一書簡集』（1995 新日本出版社）を読んだ。収録された獄中書簡 213 通の最後は 1944 年 12 月 23 日に末弟三井英雄にあてたものだが、その末尾の行は「英雄さんはなかなか多忙だろう。桐生の方へでも私のことを頼んで下さい。健在をいのります。さようなら。」であり、私が小学校５年から高校２年まで住んだ桐生（赤馬通信２号参照）の名が登場する。えっと思った。市川の次弟義雄は左翼出版社希望閣の経営をやめ、株屋勤めを始めることで獄中の兄から批判されるのだが、その義雄が桐生に住んでいたのである。私は小学６年、敗戦の年の秋、桐生市本町通のみすずや書店で「赤旗（せっき）復刊第１号」を買うのだが、みすずやがそういう販売を行ったのは、その本屋の家に羽仁五郎が疎開していたからしいということを、ずっと後で知った。敗戦直後の桐生での共産主義運動には、市川義雄も関係していたのかもしれないと今思う。いろいろな縁があるものだ。

(2002/03/29)